

ホームページを活用したPRをしている大竹いちご園は、君津ICから近いこともあり、県内をはじめ東京・神奈川を中心に多くの方が来園されています。父親の廣幸さんが先進的に高設栽培を導入し、試行錯誤を重ねた結果、栽培技術は高水準で安定するようになり、県内外のいちご農家が視察に訪れるほどです。

慶明さんが就農したのは7年前の25歳の時でした。高設栽培によるいちごの摘み取りが好評であったこと、自身で開設・運営したホームページにより来園者が増加したことがきっかけでした。「美味しいいちごを作るだけでなく、知ってもらい、食べてもらってこそ価値が出るんです。まだまだ大竹いちご園を知らない人が多いので、これからもより多くのの人に知ってもらいたい」と広報担当として情報発信の必要性を語る慶明さん。

来園者数が雨や雪などの天候に左右される難しさを感じながら、その克服方法を模索しています。

将来は、園内でお客様にいちごスイーツを食べてもらえるように、母親のトモ子さん、パートナーの美幸さんと加工品づくりにも挑戦したいと考えています。

また、御両親から引き継いだ慶明さんがそうであったように、2才になる悠叶くんが大きくなったときにいちご園の仕事が魅力的な選択肢になるようにと、日々の作業に取り組んでいます。

(藤城)



大竹いちご園 検索

「小さい子供も夢中になる美味しさ！」

～お客さん目線で、喜んでもらえるいちご園を目指して～

君津市泉 大竹 慶明さん・美幸さん

スーム
アツフ
アグリ

遊休農地の放牧利用の取組

～小さな労力で楽々管理～

放牧は家畜を草地や野草地に放ち、直接生草を採食させる飼養管理技術です。

放牧することにより傾斜地や湿地など採草利用が困難な場所でも家畜生産が行えるという利点があります。また、近年問題となっているイノシシ被害の対策としても、採食や繁殖場所となる遊休農地を減少させ、見通しが良くなることにより、農地への侵入防止効果が報告されています。

富津市豊岡で酪農を営む茂木比呂志さんは4年前から農地の放牧利用に取り組んでいます。以前は飼料用トウモロコシや乾草を生産していましたが、サルやイノシシの被害により飼料生産が困難になったため、育成牛の放牧に取り組むようになりました。

複数の小区画のほ場を電気牧柵で囲い、牧草の生育や気温に注意しながら少頭数の牛群を順次移動させる



電気牧柵による放牧

小規模移動放牧を実践しています。電気牧柵の利用により、設置や移動の作業も簡単です。

放牧に取り組む前は、牛の健康に問題が起きないか、牛が逃げってしまうのではないかなど心配したそうですが、実際に取り組んでみると、無用な心配だったとのこと。放牧によって給餌や糞尿処理に加え、草刈りの作業が減り、労力の軽減にもつながっています。

茂木さんの牧場では放牧地で牛がのんびり草を食む牧歌的な風景が広がっています。

(田仲)